山梨大学教育学部附属教育実践総合センター

センターだより 第１９７号（通巻第２６４号）

2021 年 12 月 8 日 発行
山梨大学 教育学部
附属教育実践総合センター
TEL　055-220-8325、FAX　055-220-8790
E-mail: jissen@ml.yamanashi.ac.jp
URL: https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/

※このセンターだよりで紹介した研究会、研修、教育フォーラム等に関するお知らせは、
改変しない限り、自由に複写、配布していただいて結構です。

■ 第39回教育フォーラム「GIGAスクール構想実現への取り組み ～先進校の実践事例を通して」のご案内（2 / 9）

山梨大学教育学部は、山梨県教育委員会との共催で以下のように教育フォーラムを開催します。教育について関心をおもちの方のご参加をお待ちしております。

学校においてPC 端末は、鉛筆やノートと並ぶマストアイテムとされています。
今年度、GIGAスクール構想により、１人１台端末と高速大容量の通信ネットワークの一体的な整備が実現しつつあります。また、それらのハードを活用するためのソフト面の充実や教員の指導力の向上が求められています。
GIGAスクール構想の実現に向けた学びのあり方を小学校・中学校・特別支援学校の実践例などを参考にしつつ議論します。

【日時】　令和４年２月９日（水）　午後6:00～午後8:00（受付開始　午後5:30）
【会場】　山梨県立図書館２階　多目的ホール　（コロナの状況によってはオンライン）
【パネリスト】
佐藤 丈　　（北杜市立泉小学校）
藤森　啓太　（北杜市立泉小学校）
内田　瑛一郎　（甲州市立勝沼中学校）
波多野　浩史（山梨大学教育学部附属特別支援学校）
【コーディネータ】
青柳　達也　（山梨大学教育学部附属教育実践総合センター）

■ 教職大学院第24回教育実践フォーラム「転換期の教育理論と教育実践 ー危機の時代に対応できる教員のありようを展望するー」のご案内（2 / 12）

山梨大学大学院教育学研究科（教職大学院）では、教職大学院生が教師の専門的・実践的力量の向上を目指して研究してきた一年間の成果を発表する、教育実践フォーラムを開催します。教職大学院や教育について関心をお持ちの方は、是非ご参加ください。

例年２月開催の教育実践フォーラムと同時開催してきました教職大学院の「進学相談会」ですが、今年度は中止します。教職大学院についてのご質問・ご相談等につきましては、随時受け付けていますので、ご連絡ください。

【日時】令和４年（2022年）２月12日（土） 9：15～16：00
【内容】教職大学院生による研究発表（全69本の発表を予定しています）
【後援】 山梨県教育委員会
【参加方法】Zoomミーティング
【申込方法】記載のQRコードまたはURLよりお申込みください。
1月28日（金）申込締切です。
https://forms.gle/BCjATBWBtZ4c89Gx8
【問合せ】山梨大学教育学域支援課
電話　055-220-8107
E-mail　edu-ksk@yamanashi.ac.jp

■ 山梨県総合教育センターとの第３回連携・教育研究会のご報告（11 / 19）

山梨大学教育実践総合センターと山梨県総合教育センターによる連携・教育研究会は、山梨大学と山梨県教育委員会の、教員養成及び教員研修に関わる連携の一部です。年間５回の研究会をとおして、情報を交換し合い、その成果を、山梨大学の学生に対しては山梨県総合教育センター教員が非常勤講師を務める「学校制度・経営論」の講義を通じて、また、県内の教員に対しては大学教員が山梨県総合教育センター研究大会やセンター主事研究、センター研究協力校における公開授業・授業研究会、研修会における指導助言等により支援しています。

今年度の第３回は、11月19日（金）に山梨県総合教育センター第３研修室で開催され、両センターあわせて40名が参加しました。全体会では、両センター長のあいさつに続き、長谷川千秋センター長による「昔のことばと今のことばーことばから文化を促える」と題した講演が開かれました。連携・教育研究会では、下の講演リストのように山梨大学教員による講演が毎年行われており、総合教育センター教職員が、主事研究に役立つ最新の研究成果にふれたり、教育実践研究をすすめるにあたって重要な教養を身につけたりする機会となっています。

長谷川先生からは、甲州市塩山のケカチ遺跡から出土した土器についてのお話がありました。この土器は10世紀半ばにつくられたものですが、損傷がほとんどないため、ひらがなのルーツである草仮名によって書かれた和歌の全部を「見る」ことができる全国的にみても稀有なものです。この仮名の解読の話から始まり、古代中国、明代の『人虎伝』と、それを翻案した中島敦の『山月記』を比較しながら「残月」ということばの日中のイメージの違いや両作品のことばの使い方を比較したり、『土佐日記』の「しほうみ」ということばが漢詩の「潮海」を訓読してつくられた新しい日本語（翻訳語）であることなどの例をあげたりするなど、ことばが担う文化に対する聴講者の知的好奇心を喚起する講演でした。

あらためて、教師の日常の仕事において、授業をはじめとする教育実践の多く場面で、児童・生徒とのコミュニケーションが重要な役割をもっています。このような談話や会話において、同じ言葉でも文化的背景によってイメージが異なることや言葉のもつ意味や話し相手にあたえる影響と教育効果について、あらためて考えなおすきっかけになり、教師としての広い意味での教養が涵養されたと思います。

全体会の後は、６つの分科会（小学校・中学校・高等学校・情報教育・教育相談・特別支援）に分かれ、今後の主事研究や研究協力校との実践研究に関する研究協議が行われました。

－ これまでの連携・教育研究会で開催された大学教員による講演 －

R２.11…川本静香准教授「コロナ禍における自殺予防」
R１.11…森元拓准教授「学校生活における法的責任の理論と判例」
H30.11…田中勝教授「子どもが主役 町並み保存～歴史的集落・町並みにおける地域協働のふるさと学習と担い手育成～」
H29.11…宮澤正明教授「文字文化の継承・発展に寄与する教師の役割りとは何か～新学習指導要領の趣旨を踏まえた文字・書写指導の意義と目的から～」
H28.11…松森靖夫教授「子どもの“なぜ”から始める理科授業づくり～理科好きな子どもをはぐくむために～」
H27.11…服部一秀教授「社会科教育をめぐる諸問題」
H26.12…鳥海順子教授「特別支援教育の展望」
H25.11…時友裕紀子教授「食物アレルギーの基礎知識」
H24.11…谷口明子教授「校内研究に活かす質的研究法～よりよい授業実践のために～」
H23.12…加藤繁美教授「子どもの自分づくりと保育・教育の課題～課題としての幼小接続問題～」
H22.12…成田雅博准教授「テキストマイニングの教育実践研究への活用」
H21.12…石川啓二教授「近隣諸国との競争にさらされる日本の若者—比較教育的視点から見た今次学習指導要領の背景—」
H20.12…谷口明子教授「教育研究における質的研究法の可能性～実践現場からのボトムアップ式理論構築のために～」
H20.01…中村享史教授「新学習指導要領の方向性」～ＰＩＳＡ型「数学応用力」の調査結果と関連させて～
H19.09…岩永正史教授「ＰＩＳＡ型読解力を育てるために」
H19.01…中村享史教授「算数・数学科における思考力・表現力～大規模調査の問題から～」
H18.09…岩永正史教授「説明的表現力を高める～私たちがもっている（知識＝schema）に着目して～」
H18.02…永井達彦客員教授「小・中学生と向き合う教師と学校」
H18.01…高橋英児助教授「国際学力調査から見える授業づくりの課題」
H17.09…榊原禎宏助教授「教職員の職能開発と『楽しい』研修」
H17.09…中村享史教授「米国の算数授業研究の現状」

（山梨大学 教育学部 附属教育実践総合センター ・ プロジェクト・研修・講座等
https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/2301/　より）

■ 山梨県総合教育センターとの第２回連携・教育研究会（情報教育分科会）オンラインのご報告（11 / 24）

山梨大学教育実践総合センターと山梨県総合教育センターによる連携・教育研究会の第２回は、分科会ごとに開催されました。情報教育分科会は、総合教育センターの研究協力校である上野原市立島田小学校の公開授業・授業研究会を兼ねて行うこととなったため、第３回より後の日程となりました。

コロナ禍における公開授業ということで、教室内で参与観察する人数を制限したうえで、公開授業とその後の授業研究会を、Zoomミーティングによるオンラインの併用によるハイフレックス型（同じ内容を対面とオンラインで同時に行う）による開催となりました。当センターからは、青柳達也特任教授、成田雅博准教授、石丸洋一客員教授の３名が、J422 授業研究演習室のデスクトップPC、ノートPC、持参のノートPC等を接続して参加しました。

島田小学校公開授業　学習者用デジタル教科書を活用した児童の活動

公開授業配信映像をJ422
授業研究演習室PC３台で視聴

拡大校内研参加者（島田小内外）からの
授業者や島田小への質問（Google Jamboard）

公開授業と授業研究会の会場校における運営は主に島田小学校が行い、Zoomミーティングによる授業配信とその準備は、山梨県総合教育センター情報教育部の指導主事が行いました。教室からは３台のカメラを使い、教師の教授行動、教室前方からの児童の様子、学習者用デジタル教科書を使用している

学習者の机間巡視の３画面同時視聴ができたため、オンラインでありながら教室での参与観察とくらべそれほど遜色なく授業の様子がみてとれました。研究授業（公開授業）は、４学年国語科の説明文「世界にほこる和紙」を教材とする単元「中心となる語や文を見つけて要約し、調べたことを書こう」。島田小学校は文部科学省の学習者用デジタル教科書普及促進事業の一環として全学年に国語のデジタル教科書の実践研究が行われています。今回はその成果と課題について、具体的に把握することができました。研究授業については、島田小学校では学習指導案の代わりに１枚のA3サイズのシートに、授業の目標、活動の概略・ポイント、評価の観点等をコンパクトにまとめた「授業デザインシート」が使われています。この学校では、堀哲夫名誉教授が提唱したOPP（一枚ポートフォリオ）も利用していますが、授業デザインシートも同じように一覧性が高いので、使い勝手がよいのかもしれません。授業研究会は、公開授業後に児童が下校して研究会が始まるまでの間に、参加者が Google Jamboard に質問やコメントを書き込んでおき、それらを参加者が共有して、スムーズで有意義な研究協議がすすめられました。島田小学校では、日常的にICT活用の日常化が行われており、Google Workspace のアプリである Google サイト（共有範囲を指定できるWeb作成サイト）を使い、デジタル教科書やICTを活用した実践事例を教員間で共有する取り組みが行われています。

今回の公開授業・授業研究会は、ICT活用実践の内容と、授業の参与観察と授業研究会のICTを活用した新たな方法の両面において、大変意義深く刺激的なものでした。

近年のICT機器の高性能化・小型化とその普及と、その後のコロナ禍によるオンライン・リモート環境での授業研究のニーズの高まりから、科研費の研究課題にも、ICT環境を積極的に活用した授業研究、教員研修等の研究が行われるようになってきており、この方向の研究に力を入れていきたいと思いました。

■ 日本教育大学協会研究集会における教職支援室の取組みに関する研究発表についてのご報告（10 / 2）

国立大学法人のうち教育に関する学術の研究及び教育者養成を主とする大学・学部を会員として組織する日本教育大学協会では、年に１回研究集会を開催し、教員養成の調査研究等について発表・協議の場を設けています。令和３年度日本教育大学協会研究集会（当番大学 福岡教育大学 令和３年10月２日 オンライン開催）においては、教職支援室（教職支援部門）から二つの取組について研究発表を行いました。

一つは、「教職支援のためのデータベース兼デジタル・ポートフォリオのシステム構築 ―教職キャリア・ポートフォリオ・システムについて―」と題し、教職キャリア・ポートフォリオ・システムに関する取組みについての研究発表です。倉茂花苗、川本静香、澤登義洋、清水宏幸、田中健史朗、新野貴則が担当し、オンラインによる発表は代表で新野が行いました。

もう一つは、「地域と連携した教員養成機能強化の取組 －地域学習アシスト活動の試行－」と題し、地域学習アシスト活動の取組についての研究発表です。倉茂花苗、小池健二、澤登義洋、東海林麗香、高橋英児、中村宗敬、長谷川千秋が担当し、オンラインによる発表は代表で高橋が行いました。

研究発表の内容は以下の通りです。なお、以下は当該研究集会の概要集に掲載された原稿を転載しました。

研究発表概要１

教職支援のためのデータベース兼デジタル・ポートフォリオのシステム構築　―教職キャリア・ポートフォリオ・システムについて―

１　はじめに

山梨大学教育学域では、教員養成機能の強化を図るため、令和元年度に学生の教員就職を総合的に支援する「教職支援室」の拡充改組を行った。これに伴い、複数の関係事業が計画・実施され、そのうちの一つが、「教職キャリア・ポートフォリオ・システム（略称：キャリポ）」と名付けた教職支援のた

めのデータベース兼デジタル・ポートフォリオのシステムの構築と運用である。本発表では、キャリポの機能及び運用状況とその成果と課題について報告する。

2　事業の目的

キャリポの設計にあたっては、教員就職支援に関する二つの課題の解決を目指した。一つは、教職支援に係る様々な学生の個人データを一括管理しデータベース化することである。それまでは学部内の部署ごとにデータを管理していたため、集計や分析、個人情報の安全な管理の効率性が低かった。そこで、諸データを合理的に一括管理することで、データセキュリティを向上させるとともに、その時々の調査目的に応じ効率よく集計し、分析できるようにすることを目指した。

もう一つは、学生が教員採用試験対策講座等へ参加しやすいように関係する諸情報等をまとめてデジタル・ポートフォリオ上に提示することである。それまでは教員採用試験対策を実施する複数の部署がそれぞれ企画し、それぞれの方法で広報や申込手続きを行っていたため、学生は情報収集と手続きに手間を取られていた。これを一つにまとめ、かつ、いつでも情報にアクセスできるようにすることで、学生の利便性を高めることを目指した。さらに、自身の学習状況の記録や確認をできるようにし、学習活動への意欲を高め、充実させることを目指した。

3　キャリポ、機能の概要

キャリポに搭載される機能は、上に記した課題に応じて二つに分けることができる。

（1）データベース

データベースでは、教職支援事業の工夫改善に資する資料を作成するための情報を収集・整理する。収集・整理する情報は次の通り。①学籍等に関する情報、②教育ボランティアに関する情報（地域学習アシストに関する情報を含む）、③進路希望に関する情報、④教員採用試験対策講座への出席状況、⑤教員採用試験模試の結果、⑥教員採用試験の合否状況、⑦教員採用試験後のアンケート調査結果、⑧卒業・修了後の進路状況。

なお、データベースとして収集された情報は、必要な項目を抽出して出力できる他、学生の学習状況等を個票として出力でき、指導の際に活用できるようになっている。

（2）デジタル・ポートフォリオ

デジタル・ポートフォリオでは、学生がスマートフォンやPC等から、教員採用試験対策の学習支援に関する情報へアクセスすることや、学習の振り返りをすることなどができる（図を参照）。具体的には、①教員採用試験対策講座等の受講記録の確認機能、②受講講座等での学習の振り返りのコメント入力機能、③教員採用試験対策講座のスケジュール確認と申込機能、④先輩からの応援メッセージ掲載機能、⑤教職支援室からのメッセージ掲載機能があり、加えて、関係するwebサイトにアクセスできるリンクを貼り付けている。

なお、①については、自身の学習状況を直感的に把握できるようにキャラクターが講座の受講回数等で成長するようにした。

4　運用しての成果と課題

キャリポは、令和元年度に設計・構築され、令和2年度から運用を開始した。データベースとデジタル・ポートフォリオのそれぞれの成果と課題について簡潔に述べる。

（1）データベースの活用

学部教員による教員採用試験対策結果分析WGを立ち上げ、収集・整理したデータをもとに教員採用試験対策各種事業の分析を行っている。分析の結果は、教員養成機能強化に資する資料として有効に活用することができた。今後も継続して集計・分析することにより、より有効な資料として活用することが期待できる。

（2）デジタル・ポートフォリオ

運用開始した令和2年度は、コロナ感染症対策の影響やログインの認証機能に課題があり利用者は想定よりも少ない状況であったが、それぞれの課題について対策を講じており、令和3年度の利用者の増加が期待される。また、令和2年度に利用した学生にキャリポの有効性についてのアンケート調査を行った結果、認証機能の課題に関することをのぞけば高評価であり、おおむねねらい通りの結果になった。

研究発表概要２

地域と連携した教員養成機能強化の取組　ー地域学習アシスト活動の試行ー

１．はじめに

山梨大学教育学域では、教員養成機能の強化を図るため、令和元年度に学生の教員就職を総合的に支援する「教職支援室」の拡充改組を行った。これに伴い、複数の関係事業が新たに計画・実施され、その事業の一つが、従来の教育ボランティア活動の発展的活動として、地域や学校の抱える教育課題の解決に向けての支援を行う「地域学習アシスト（課外学習）」である。本発表では、「地域学習アシスト」の概要と活動状況、その成果と課題について報告する。

２．事業の目的ー「新たな課題に対応できる実践力を身につけた教員の養成」

本事業では、学校現場で採用時から長期にわたり活躍できる実践力を有する教員養成を行うことを目的としており、これまでの教育ボランティア活動を発展させるものとして構想されている。そして、「学校現場の課題を学校と大学が共有し、協働して解決策を探る」という方針の下で、学校現場の教師にとっても教員を目指す学生にとっても、双方にメリットがある事業となるよう、多忙な学校現場に配慮しながら、事業を計画・運用してきている。

３．地域学習アシスト事業の概要

先述のように、本事業は、地域における学校の実情による課題の解決に向けて、学習支援を中心に、学校をチームでアシストするという点で、これまでの教育ボランティア活動の発展的活動として位置づけられている。活動の特徴は、主に以下の点にある。

①チームカンファレンスを中心とした活動

教育ボランティア活動は、主に学生が個別に活動を行うのに対し、地域学習アシスト活動では、２人で１つのチームをつくり、各学校で毎週１回２時間程度の支援活動を行う。そして、活動後は、大学において、毎回の活動についての報告（「カンファレンスシート」）を基にしたカンファレンスを行い、活動の振り返りと次回の支援の方針等を検討する。このカンファレンスには、教職大学院生（ストレートマスター、現職教員）、専攻科生（特別支援教育）、大学教員が毎回参加している。

カンファレンスでは、実際を見ている学生が感じたこと、見たことを大切にする「伴走的な関わり方」に主眼を置き、学生の悩みや成長を受け止め、学生が自身の子ども理解・分析と指導について省察できるような対話・声かけをすること、学生の見方や対応を尊重した上で、別の可能性・考え方も提起

するといった学生の次への意欲を引き出す助言・支援を行うことといった方針をカンファレンスメンバーと共有し､行っている。

②学校の方針（要望）に基づいた、観察／記録－分析／相談－方針・計画立案－実施というサイクルで行う活動

地域学習アシスト活動では、各学校が課題としているところ、支援が必要なところについての学校の要望を受けて、チームが支援活動を行う。そのため、各学校の要望によっては、まず学級や子どもの様子についての観察と情報収集から始めていく場合もあれば、学校が要望する支援活動から始めていく場合もあるが、全体としてみれば、活動を通して学生が観察した学級や子どもについての記録（情報）や気づき・発見（カンファレンスによる分析に基づく）などを各学校と共有し、学生・大学と学校が支援の方針や指導計画を考え、実施するというサイクルとなっている。

４．本事業の成果と課題－2020 年度の成果と課題を中心に

本事業では、2019 年度は２校、2020 年度・2021 年度は３校の小学校を対象に行ってきており、参加者の意見を基に、運用計画や運用内容・方法を改善しながら取り組んできている。特に2020 年度からは、各チームの活動を担当教員（教職支援室長、特任助教、地域学習アシスト領域副部門長）が毎回参観し、事前・事後の学校との打ち合わせにも参加するようにして、アシストチームと学校との橋渡しを円滑に行うとともに、担当教員が学生の成長を見守る体制を作り、従来のカンファレンスの方法（カンファレンスシートの改善、学校ごとの検討・協議を中心にその成果を全体で共有する工夫など）の改善を行った。

2020 年度の成果としては、①学生の子ども理解と支援の質的深化など学生の大きな成長が見られた点、②各学校と情報を共有し、課題の共有が前年度以上に進められたこと、が挙げられる。一方で、今後事業を継続的に行っていく上での課題としては、①より良いアシスト活動が展開できるように大学・学生と学校・教員・子どもとの信頼関係の構築のための時間の保障（活動前後の時間の確保、活動期間等）、②本事業で目指す「課題解決」のスパンの考え方（中長期的な展望の中で、何を課題とし、ゴールをどこに据えるか）、③持続可能な運用体制の構築（時期、日程、人的資源・組織体制）が挙げられた。

この成果と課題に基づいて、2021 年度からは、アシスト活動を前期から始め、アシストチームが教師・子どもたちと関係を築きながら長期にわたって支援を行うように計画し、実施してきている。

これまでのセンターだよりの一部は，https://www.edu.yamanashi.ac.jp/aepc/2306/　で見ることができます。